

東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち(1)

木 畑 和 子

1. はじめに

20世紀は難民の世紀とも呼ばれる¹⁾。戦乱、迫害、新たな国境線の策定などによって、多くの難民が生み出されてきた。しかしそのような状況は21世紀にも舞台を移しつつ引きつがれ、今日に至るまで、世界各地で多くの難民が生まれている。

本稿で対象とするのは、ナチズム支配が生んだドイツのユダヤ人難民の問題であるが、まず注意しておきたいことは、この大量難民排出時代の20世紀において、彼らが同情や理解の対象にはならなかったことである。第三帝国成立当初の難民は多少なりとも同情をもって受け入れられたが、まもなく各国のユダヤ人難民受け入れ制限傾向が強まり、彼らは人道問題というよりも、むしろ外交問題の対象となったのである。

1938年3月アメリカ合衆国のローズヴェルト大統領は、ユダヤ人難民の受け入れに関する国際会議を30か国に呼びかけ、同年7月エヴィアン会議が開催されたが、結局どこの国もほとんどその門戸を広げようとはしなかった。しかし、各国政府の対応とは対照的に、人道的観点からユダヤ人を受け入れた動きも存在した。本稿で扱う「キンダートランスポート (Kindertransport 子供の輸送)」は、その代表的なものである。

エヴィアン会議から4か月後の38年11月9 - 10日に「11月ボグロム」(「帝国水晶の夜 ライヒスクリスタルナハト」)が起こった。その苛酷なユダヤ人迫害に衝撃を受けたイギリスなどの宗教団体・人道主義団体が、政府にユダヤ人の子供の入国を認めるように働きかけ、キンダートランスポートが始まった²⁾。これによって、第二次世界大戦勃発までのわずかな期間で約1万人のドイツ・オーストリア・チェコスロヴァキアのユダヤ人の子どもたちがイギリス・オランダなど数か国に引き受けら

れた。各国がユダヤ人の受け入れを拒んでいるなか、民間の人道主義運動によって、子供だけに特別な入国枠が与えられたのである。

筆者はかねてから、この問題を研究テーマとしてきたが³⁾、本稿ではそのキンダートランスポートでイギリスに渡り、戦後旧東ドイツ（ドイツ民主共和国）で暮らした人々を通して、亡命・難民生活・帰国という問題を扱っていく。インタビューによって彼らの人生をたどっていくという日常史的な記録が主となるが、その歴史的背景も書き加え、歴史に生きる人々の姿を示していきたい。

まずここでインタビューの対象者の概要と本稿の目的を述べておきたい。彼らはキンダートランスポートの子供たち（ゼロ歳から17歳）のなかでは、比較的年齢が上だった人々である。子供たちはイギリスで里親のもと、あるいは寮などで生活したが、18歳で自立することになってきたため、インタビュー対象者はイギリス到着後数年すると、家庭や寮からでて働く年齢となった。彼らは戦時下に若い難民として生きていくなかで、ドイツ共産党（KPD）の亡命者たちの影響を受け、ファシズムと戦うことを人生の目標としていった。彼らのほとんどは社会主義や共産主義とは関係のない、比較的豊かな家庭の子供たちであったが、抵抗のために出国した政治的亡命者の姿にひきつけられたのである。

そうした思想を抱くにいった彼らは、戦後の混乱期に「よりよきドイツ建設」のためにソ連占領地区に戻り、自分たちの家族を殺害した人々のもとで暮らすことを選択した。子供時代にドイツ人であることを拒絶される経験をして、ナチズムとドイツとは違う、としてドイツを否定せず、ドイツでドイツ人として生きようとしたのである。キンダートランスポートでイギリスに渡った子供のうち、戦後ドイツにもどった人は非常に少ない⁴⁾。

自分が受けた苦難の経験と共産主義思想の影響から、社会主義国家建設によって二度とファシズム体制に支配されることのない社会をつくらうという理想をもって帰国した彼らは、東ドイツ国家建設とともに自分たちの生活を築いていった。ちょうど彼らが定年⁵⁾などで社会の一線から退いたその頃、東ドイツの崩壊とドイツ統一が起こったのである。旧東ドイツを「不正国家」とみなす否定的風潮のなかで、老境を生きる彼らの姿は、ドイツ現代史そのものと重なる。

インタビュー対象者の多くはイギリスで亡命ドイツ人青年による反

ファシズム組織であるFDJ（Freie Deutsche Jugend 自由ドイツ青年同盟）に所属していたが、その組織の歴史は東ドイツ時代に「抹殺」されており、研究テーマとしてほとんど扱われてこなかった。東ドイツの青年組織FDJがエーリヒ・ホネカーによって「創設された」という「神話」にとって、イギリスでの前史は余計なものであったのだ⁶。（ただし東ドイツ時代のFDJ旗は、イギリス時代のFDJのものを受け継いでいる。）そのこともあって、彼らの歴史を少しでも多く残しておくということも、本稿の目的となっている。

本論に入る前にインタビュー記録の扱いや資料的価値に関して少し述べておきたい。インタビューという方法にさまざまな問題があるのは、言うまでもない⁷。歴史証言者の言い間違えや記憶違いからくる問題とは別に、聞き手が質問しなかったから、あるいはインタビュー対象者が話したくなかったから、話にでてこなかったことのために、結果として誤った像を作り出す可能性がある。聞き手の理解の不十分さから真意をとりそこなっていることもある。筆者からの質問を受けて引き出された話や、話し手が記憶し伝えなかった話から構成された像が、「実像」とかなりのズレをみせることも考えられる。

また以前私が行って小冊子にまとめたインタビューの対象は一人のみであり⁸、インタビューの積み重ねから信頼関係もそれなりに出来たために聞けた話もあったが、今回の場合人数も多く時間が限られ、聞き手との信頼関係が出来ていないために、話し手が語ることを控えたことが多々あるのではないかという危惧もある。

このような問題を含みつつも、文献資料で読んだことが当事者から直接語られる時、「ああそうだったのか」と思うことがしばしばである。もちろん文献資料では知りえなかったことも多く、学ぶことが非常に大きかった。また、理想と現実がぶつかりあいながら、苦難を乗り越えていった彼らの生き様には強い魅力を感じた。このようなことからオーラルヒストリーにはさまざまな留意点があることを前提として、インタビューの内容を、語られた記録として残しておきたい。本稿は集団ポートレートのかたちとなるが、これを通して亡命者の姿の一端を示すことが筆者のささやかな望みである。

なお、直接の聞き取り以外にも彼らが出した手記集をはじめとする関連文献や資料で、証言やその内容を補強し、語られた言葉をそのまま採

録するのではなく、まとめた形で記した⁹⁾。また、次に紹介するように本稿で扱うインタビューの対象者のほとんどはキンダートランスポートでイギリスに渡った人々であるが、それとは別のルートでイギリスに渡った人も含まれている。若いユダヤ人難民としての彼らの経験は共通しているため、そうしたケースも含めることにした。

以下、筆者がインタビューをした12名に関して短い人物紹介をしておく¹⁰⁾。

番号の からは東ドイツに戻った人々で、を除く全員がFDJのメンバーである。はFDKB (Freier Deutscher Kulturbund 自由ドイツ文化同盟) という、より文化的色彩の強い組織のメンバーである。またからはキンダートランスポートで、は別のルートでイギリスに渡った。はFDJ資料収集などの助言をもとめて会ったため、個人にまつわることはあまり聞いていない。はユーゲント・アリヤー (Jugend Alijah)¹¹⁾のメンバーで、キンダートランスポートによってイギリスに出国した。

ウルズラ・デーリング : Ursula Döring (1921年ベルリン生まれ)

父親は文筆家。社会民主党员。母親は写真家。弟とともにキンダートランスポートでロンドンへ。母親もメイドの仕事を得て、イギリスへ。父親はアウシュヴィッツで死亡。帰国後、いくつかの工場で働く。

ヘルガ・エーレルト : Helga Ehlert¹²⁾ (1923年ライプチヒ生まれ)

ポーランド系ユダヤ人。毛皮店を経営する豊かな家庭に生まれる。弟とキンダートランスポートでエディンバラへ。父親はクラカウ近郊タルノフで射殺。母親はピアウリストクでガス殺。戦後夫とともに帰国。夫はスペイン内乱に義勇兵として参戦した経歴により失職。その後通訳などとして働く。

アルフレート・フライシュハッカー : Alfred Fleischhacker¹³⁾
(1923年バーデン・ヴェルテンベルクのメルヒンゲン生まれ)

父親は繊維業(布地売買)。キンダートランスポートでボンマスへ。両親と妹はベタン政権下のゲール収容所へ。妹は収容所からフランスのレジスタンスによって救出された。両親はアウシュヴィッツで死亡。東ドイツではジャーナリストとして働く。

クルト・グートマン：Kurt Gutmann (1927年ニーダーラインのクレーフェルト生まれ)¹⁴⁾

父親は早く亡くなり、母親は遺族年金で生活。三人兄弟。次兄はグラスゴウの慈善孤児院へ。クルトはキンダートランスポートで兄と同じ孤児院へ。長兄は出国出来ず、母親とともにルブリン近くの中継強制収容所に入れられたが、死亡地は不明。帰国後通訳や翻訳家として働く。

ヘラ・ヘンドラー：Hella Händler¹⁵⁾。(1923年オランダ近くの小都市クヴァッケンブルック生まれ)

父親は材木商を営んでいた。彼は11月ボグロムで逮捕され、ブーヘンヴァルト強制収容所で殺害される。ハンブルクの孤児院に姉妹で入り、妹とともにキンダートランスポートでブライトンへ。看護婦として働く。母親はおそらくミンスク(当時ソ連)への移送後、当地で殺害された。帰国後ソーシャルワーカーなどとして働く。妹はイギリス在住。

マルレーネ・レーマン：Marlene Lehmann (1925年ベルリン生まれ)

父親は大きな宝石商で働き、その後ハンブルクに引っ越し、絨毯を扱っていた。一人娘。キンダートランスポートでピーターズフィールドの寄宿学校に入るが、学費が続かずにロンドンへ。両親はミンスクで殺害さる(推定)。ご主人もキンダートランスポート出身だが、3年前死亡。

インゲ・ラメル：Inge Lammel (1924年ベルリン生まれ)¹⁶⁾

父親は銀行員。彼女はキンダートランスポートでシェフィールドの寄宿学校へ。身元引受人は美術教師。姉もキンダートランスポートでイギリスへ。母親はアウシュヴィッツへ直接移送され、父親はテレジエンシュタットを経由しアウシュヴィッツへ移送。その後は不明。帰国後大学に入り、ドイツ労働運動歌を研究。博士号取得。その後、労働運動歌文書館館長。労働運動歌に関する著書多数。姉はイギリス在住。

エーファ・パッペンハイム：Eva Pappenheim (1924年フランクフルト・アム・マイン生まれ)

父親は法律家。姉は結婚相手の呼び寄せによってアメリカに出国。彼女はキンダートランスポートでロンドンへ。母親もイギリスへ出国。

父親は43年逮捕を前にして自殺。帰国後教育学を学び博士号取得。大学で上級助手を勤めた。

ヴェルナー・ヘンドラー：Werner Händler の夫。(1920年オーバーシュレジエンのピスマルクヒュッテ生まれ)

鉄関連製品を扱う豊かな家庭出身。成人に達していた兄・姉は37年に出国。11月ボグロムで強制収容所へ。釈放後、イギリスのキッチン・キャンプへ。両親はアウシュヴィッツで射殺。帰国後、ジャーナリストとして働く。

ウルズラ・ヘルツベルク：Ursula Herzberg¹⁷⁾(1921年ベルリン生まれ)

父親は会社員。親戚のついででロンドンへ。父親は38年彼女の出国前に死亡。母親は43年アウシュヴィッツへ移送さる。帰国後、検事の道へ。

ハンス・ヘルツベルク：Hans Herzberg¹⁸⁾(1921年ハノーヴァー生まれ)

豊かな家庭に生まれた。イギリスでは園芸師として働く。帰国後、ジャーナリストとして働く。

エスター・ゴラン：Ester Golan (1923年シュレジエンのグローガウ生まれ)¹⁹⁾

父親は靴店経営者。母親は熱心なシオニスト。兄はユージェント・アリヤーでパレスティナへ。彼女はキングダートランスポートでスコットランドへ。妹もキングダートランスポートでイギリスへ。両親はテレジエンシュタットに送られ、父親は死亡。母親はさらにアウシュヴィッツへ移送され殺害された。エスターは戦後すぐに夫とともにパレスティナ(現在のイスラエル)へ移住。70歳を過ぎてから大学入学。その後修士号取得。

次節以降、まずそれぞれのテーマについての解説を簡単に行った後、インタビューと関連資料から構成した各個人の記録を記載することにする。

注

1) Tony Kushner/Katharine Knox, *Refugees in an Age of Genocide*. Global,

National and Local Perspectives during the Twentieth Century (London/Portland, 1999), 1.

- 2) このキンダートランスポートという言葉は、ドイツ在住ユダヤ人全国代表機関 (Reichsvertretung der Juden in Deutschland) の子供出国課 (Apteilung Kinderauswanderung) で11月ポグロム以前より使われており、必ずしもこの時期の子供の救出活動だけに使われているわけではないが、本稿ではこの狭義のキンダートランスポートを対象とする。Gudrun Maierhof, Es ist hier, mit einem Wort gesagt: Wonderful, in: Gudrun Maierhof/Chana Schütz/Hermann Simon (Hrsg.), *Aus Kindern wurden Briefe. Die Rettung jüdischer Kinder aus Nazi-Deutschland* (Berlin, 2004), 222 n.26. なお後にアドルフ・アイヒマンは、殺害目的でユダヤ人の子供たちを親から引き離し、フランスからポーランドに移送することについて、この用語 (Kindertransporte 複数形) を使っている。David Cesarani, *Eichmann. His Life and Crimes* (London, 2004), 142. もちろん彼は子供を救出するためのキンダートランスポートを知っており、実際11月ポグロム後、オーストリアのあるユダヤ人にキンダートランスポートでその子供を出国させられることを教えている。Bertha Levertov/Shmuel Lowensohn (eds.), *I Came Alone. The Stories of the Kindertransport* (Sussex, 1990), 103-104.
- 3) 木畑和子『キンダートランスポート ナチス・ドイツからイギリスに渡ったユダヤ人の子供たち』(成文堂、1992年)
- 4) 戦後キンダートランスポートの「子供」たちはイギリスに残るか、あるいはパレスティナやアメリカに移住していった。Rebekka Göpfert, *Der jüdische Kindertransport von Deutschland nach England 1938/39. Geschichte und Erinnerung* (Frankfurt a.M./N.Y., 1999) 186,188-189.
「子供」たちのなかには、ドイツを拒絶している人が多い。自分より年上のドイツ人をみると、あの人たちは戦争中なにをしていたのか、と思う人も少なくないようだ。反セム主義研究所 (ベルリン、2002年6月) 主催の「歴史証言者」の催しで、キンダートランスポートの女性が、母語がドイツ語であるにもかかわらず、精神的にどうしてもドイツ語が話せないので失礼しますと、ドイツ語なまりがぬけていない英語で発言した姿が印象的であった。
- 5) 旧東ドイツではナチに迫害された人々に対する早期年金支給制度という優遇措置があり、彼らは早く定年を迎えている。
- 6) Alfred Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben, Erinnerungen und Dokumente zur Geschichte der Freien Deutschen Jugend in Großbritannien 1939-1946* (Berlin, 1996), 7. このFDJは東ドイツ社会におけるただ一つの青年組織であり、200万人のメンバーを擁していた。
- 7) ドイツ支配下のある農村に関してのオーラルヒストリーの研究報告を聞いたことがあるが、「同じ家族でも違うことを言う。同じ人でも別の日には違うことを言う」という嘆きの言葉が報告者よりもれた(反セム主義研

究所、2004年6月9日ゼミ)。どのように事実を確定し、歴史を構築していくかというのは、オーラルヒストリーにつきものの問題である。

筆者の経験でも、筆者とのインタビューで語られる「事実」が、細い点ではあるが他のインタビューで語られた「事実」と違うことが何度があった。

また、別な機会で絶滅収容所の生存者に収容所での生活に関してこまごまとしたことをいくつか質問したことがあるが、ほとんどに「覚えていない」、「知らない」と答えられたのに、驚いたことがある。60年前のことを忘れるのは自然なことではあるが、記憶したくなかったことも多いのではないかと考えられる。

- 8) 木畑『キングダートランスポート』
- 9) インタビューのほとんどはMDディスクやカセットテープに収録したが、一部電話での問い合わせなどもある。インタビュー記録をおこすにあたって、バーバラ・ティルマン氏や渡辺玲奈氏の援助をえた。ここに記して謝りたい。
- 10) 名前を伏せて欲しいという人の名前は変えた。
- 11) ユーゲント・アリアーは1932年、レヒャ・フライヤー (Recha Freier) が創設したパレスティナ入植青年組織である。32年から39年にかけて4500人の青年をパレスティナに送った。 *Rettet die Kinder! . Die Jugend-Aliyah 1933 bis 2003. Einwanderung und Jugendarbeit in Israel* (Ausstellung im Jüdischen Museum), (Frankfurt a. M., 2003); Recha Freier, *Wurzeln schlagen*, in: Maierhof/Schütz/Simon (Hrsg.), *Aus Kindern wurden Briefe*, 262-313.
- 12) この注12から注19は直接の聞き取りの他に利用した、その個人に関する資料である。

Mario Kessler, *Exilerfahrung in Wissenschaft und Politik: Remigrierte Historiker in der frühen DDR* (Köln u.a., 2001), 162-196; Anette Leo, An diesem Verfahren stimmte was nicht, Südwestfunk Baden-Baden (2005年3月29日放送)
- 13) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 11-25.
- 14) *Über Kurt Gutmann. Wer möchte nicht im Leben bleiben..*(私家版 Berlin, 2004)
- 15) 妹のウルズラ・ローゼンフェルトのインタビュー(以下に所収)も参照した。Mark Jonathan Harris/Deborah Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers. Stories of the Kindertransport* (New York/London, 2000).
- 16) *Ihr Koffer steht wieder in Berlin* (*Neues Deutschland* の2003年5月8日付記事); *Geteilte Erinnerungen. Ein Interviewfilm*, DVD (Berlin, 2005).
- 17) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 98-107.
- 18) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 87-97.
- 19) Ester Golan, *Pleased to meet you. Stage on the way: From Glogau to*

Jerusalem (私家版 *Jerusalem*, 2000) ; Golan, *auf Wiedersehen in unserem Land* (Düsseldorf, 1995) ; Maierhof/Schütz/Simon (Hrsg.), *Aus Kindern wurden Briefe*, 153.

2. 第三帝国成立と子供たちの生活

第三帝国成立とともに始まった反ユダヤ主義政策は、ユダヤ人の子供たちの生活を直撃することになった。ほとんど毎日といってよい程出されるこまごまとしたユダヤ人関連特別法の影響は、すぐに学校の教室のなかや子供の遊びの世界にまで入ってきた。教師や生徒によるユダヤ人生徒へのさまざまないじめが起こったのである。

ナチの学校教育に関する基本方針の一つは、学校からの「非ドイツ的」なるものの放逐である。まず政権成立直後に教員の一元化 (Gleichschaltung) が行われ、ユダヤ人教員がドイツ人学校を辞めさせられた¹⁾。教科内容も人種の憎悪を生徒に植えつける目的が加わり、さまざまな形で「ユダヤ人問題」が教室で扱われることになった。またユダヤ人の生徒はナチの人種主義的人類学の授業からはずされ、祝祭の行事、遠足、水泳の授業にも参加出来なくなるなど、学内で孤立した存在となった。さらに子供たちに対するいじめも暴力的なものになっていった²⁾。

このような状況のなか、義務教育年齢の子供たちのユダヤ人学校への転校が進んでいった。第三帝国成立当初は、多くの同化ユダヤ人の家庭では公立学校のほうがユダヤ人学校よりもレベルが上であるとして、子供たちをそのままドイツ人学校へ入れていた³⁾。しかし学校での子供をめぐる環境の悪化に加え、家族が身の安全のために地方から都市へ、小都市から大都市へと移動したことにより、ユダヤ人の子供たちはユダヤ人学校へ集中していったのである。

1933年末にドイツには義務教育年齢のユダヤ人の子供が約6万人いたが、そのうちの約25パーセントにあたる約1万5000人が80校のユダヤ人学校に、残りはドイツ人学校に通っていた。37年12月には、ユダヤ人学校に通う子供の数は2万3670人へと増加し、またユダヤ人学校数も167校へと増加した。この間、ユダヤ人の子供の数は出国によって約3万9000人に減少しているために、これは義務教育年齢の子供の60パーセント以

上がユダヤ人学校に通っていることを意味した⁴⁾。ユダヤ人学校が急遽増設されたことや生徒の転入・転出という移動、さらに教師も出国のために顔ぶれがしょっちゅう変わったことなどによって、教育のレベルもさがり、教室は落ち着かない雰囲気にも包まれていた⁵⁾。

ユダヤ人の子供がドイツ人学校に通うことが禁止されたのは、11月ポグロムの直後（11月15日）のことである⁶⁾。39年初めには義務教育年齢の子供約1万9800人がドイツに残っていた。教室がポグロムによって破壊されたり、教師も生徒も出国が増えたりしたため、ポグロム後は秩序だった学校運営など不可能に近かった。ユダヤ人学校の閉鎖が相次いだ、39年10月にはなお120か所で小規模な教室の形をとって教育が続けられていた⁷⁾。

ユダヤ人の子供が学校や大学で学ぶ機会が狭められる一方で、親たちも、また本人たちも、教養教育よりも実際の教育の方が重要であると判断し、職業教育へ進路変更する傾向にあった。恐慌のおおりで、外国に出ても商業で生きる道はないであろうと、農業、手工業の訓練を受けさせることが好まれた。一般的にいつて出国に際し、アビトゥアなどは職人検定審査合格証よりも役に立たなかったのである⁸⁾。

子供たちは学校生活でも不安な日々が続いたが、多くのユダヤ人家庭では、父親の失職による困窮化が進んでいった。借りていた住居を退去させられたことによって、家族がばらばらに生活するようになった人、あるいは困窮化によって片親がいても孤児院にはいることを余儀なくされた子供もいた。

ナチ体制初期のユダヤ人排斥プロセスで重要な意味をもったのが、職業官吏再建法（Gesetz zur Wiederherstellung des Berufsbeamtentums 33年4月7日発布）であった。これによってユダヤ人の公務員や教師が解雇されたが、この法律の影響を受けて、民間会社で働いていたユダヤ人も退職させられる場合が少なくなかったのである。この法律はユダヤ人たちに経済面で大きな打撃を与えた。さらにこの職業官吏再建法の影響下で、ユダヤ人たちはコーラスや体操、ハイキングなどのクラブから退会させられるようになった。こうして彼らは社会的な結びつきからも切り離されるようになったのである。

ウルズラ・デーリング

文筆家の父親は、一日中カフェーに座って詩を書いているような人で、母親が写真家として働き、生活をたてていた。多くの人がカメラを持つようになると、写真では生活をたてられなくなったので、化粧品を製造する会社を作るなど、母親は実際的な人だった。両親は社会民主党を支持しており、子供たちの誕生日に親戚があつると、子供などそっちのけで共産党員のおばなどと政治談義に花を咲かせるような家庭であった。

両親はシナゴークにも行かないような、非宗教的な家庭で、弟も割礼を受けておらず、後にイギリスでユダヤ人の子供むけ寮に入った時、本当にユダヤ人かどうか疑われたこともあった。彼女は社会主義教育を行う学校に入っていたが、ナチの政権成立によって、その学校は廃校となった。

またナチ政権掌握後、それまで住んでいた賃貸住宅から追い出されたため、家族はばらばらに生活することになった。父親と母親はそれぞれ親戚の家へ行き、彼女と弟と一緒にカプート児童ホーム（Jüdisches Kinder- und Landschulheim Caputh in Potsdam）で暮らし始めた。教育学者ファイアターク（Getrud Feiertag）が1931年に開設したこの小さな寄宿学校に入った子供は中産階級の同化ユダヤ人家庭が主だった。ナチの反ユダヤ主義政策が強まるにつれ、子供たちの数も増えていった⁹⁾。

デーリングの父親は、シオニズムは民族主義的、プチ・ブル的であると批判的だったが、ファイアタークはシオニストとして非常に有名な人だった。キブツのアイディアは社会主義的であるからよい思想であるという考えをもっていたという。クラスにはユーゲント・アリヤーのメンバーもあり、近代ヘブライ語の授業もあった。「ファイアタークはどこにでも出国出来たのですが、子供たちがすべて出発してから、と残ったため、アウシュヴィッツで死んだのです。素晴らしい女性でした。独身だったけれど、本当の母親でした」とデーリングは懐かしそうに語ってくれた¹⁰⁾。

デーリングはヒトラーがユダヤ人たちを追い出したがっていることを十分認識しており、出国のためにドメスティックな仕事の資格をとることにし、3年あまり生活したカプートを離れた。彼女は子供が好きだったため幼稚園教諭のコースで学んだが、理論的なものには強くても、実習では子供がのってこなくてうまくいかなかったという。

ヘルガ・エーレルト

父親はクラカウ出身のポーランド系ユダヤ人で、1920年にドイツへ移住した。母親はドイツ系ユダヤ人であった。ヘルガと2歳違いの弟はともにポーランド国籍であった。ユダヤ教徒としてはユダヤ教の大きな祭日のみを祝う程度であり、食事でもコーシャを守らずクリスマスを祝うような家庭だった。

父親はライプチヒで毛皮通りといわれる通りで、毛皮店を2軒もっており、暮し向きは豊かだった。子供時代には家政婦と乳母がいたが、その使用人たちは33年か34年には辞めなくてはならなくなり、別れの際には使用人も母も泣いたという。戦後彼女がドイツに戻った時にこの人たちと再会出来たが、その時も皆で泣いた。

彼女は36年にユダヤ人学校へ転校した。それまでいた女子の私立小学校でのいじめはまれで、表面化していなかったが、ただ一度、二人の女の子に「ユダヤの豚」と言われたことがある。しかしその時には、それが何を意味するかわからなかった。また、教室に「ドイツ人であることを感謝せよ」という標語があり、ユダヤ人が望まれていないことは感じていた。

アルフレート・フライシュハッカー

父親はバーデン州の小さな町で繊維業を営んでいた。その町ではユダヤ人は20家族ほど住んでいた。一家はコーシャを守っていたが、結局その肉が手に入らなくなってしまった¹¹⁾。シナゴークの聖歌隊隊長が私的にやってくれた時には肉が食べられた。

ニュルンベルク法¹²⁾以降、ウルムの小学校へ行ったが、その経緯は子供だからわからない。この学校はシナゴークのなかにあったが、11月ボグロムで破壊された。その後マンハイムのユダヤ人学校へ転校するため、家族と離れて孤児院に住むことになった。

クルト・ゲートマン

父親は第三帝国成立前に死亡し、未亡人となった母親は一人でこの苦難に立ちむかうことになった。彼女は頭のよい人で1934年にはこれから何が起こるかわかっていたという。「自分のもっているものを人と分かち合いなさい」と言うような人だったが、もうそんなことは出来ない時

代だった。

母親は子供を育てること自体に不安をもっており、ある時ナチの若者が、家の窓のところで騒いでいたことから希望を失って、自殺を図ったこともあった。彼は学校から帰ってくるたびに、母親が死んでいるのではないかと不安だった。

ナチが行うパレードなどで出される、ユダヤ人の処刑を模した山車は幼心にとても怖いものだった。パレードの時に街にでても身の危険を感じることはなかったのは、彼が金髪で青い目をしており、ステレオタイプ化された「ユダヤ人顔」ではなかったためである。

小学校（プロテスタント系）ではクラスでユダヤ人は彼一人だった。成績は良かった。彼が8歳の時、学校で校長と担任に手ひどい扱いを受けたことがある。校長は、教員試験も受けていない教育もないSA（突撃隊）の党员で、担任の歴史と体育を教える教師も反ユダヤ主義者だった。ある日、この担任に校長のところに行って課題をもらってくるように言いつかった。校長はドイツの少年はなんていって挨拶するんだね、と「ハイル・ヒトラー」と言わせようとしたが、彼が黙っていると、ムチでたたいた。結局課題を聞けずに教室に戻った彼は、今度は体育教師にムチで指をたたかれた¹³。

このような教師からのいじめだけではなく、子供たちによるいじめもしばしばあった。彼は腕力が強かったので、他の子供たちのいじめにあっても、「卑怯者、一人ずつかかって来い」といって利腕の左手で相手の頭を抱え込んで、右手でいじめた子供を殴ったこともあった。ある日、突然後ろから集団で襲われ、かばんで何度も殴られたことがある。この体験から、今でも突然後ろから人に肩をたたかれると非常にドキッとするという。

いじめに加わらなかった子供が一人いたが、その子供も薄暗くなくなって遊んでくれただけだった。その子供は共産主義者の鉱山労働者の子供で、彼も他の子供たちから疎外されていた。彼が10歳の時に、子供たちが彼にむかって「ユダヤの血が刃先にほとばしる時、また素晴らしい世界となる（Und wenn das Judenblut vom Messer spritzt, dann geht's noch mal so gut）」とはやしたててきた。これが歌の全部かわからないが、彼はこのことを一生忘れられない。

ヘラ・ヘンドラー

彼女が住んでいたところはオランダの近く、人口5000人あまりの小さな町で、近くの農村を含めてもユダヤ人家族は23家族だけだった。父親はユダヤ人共同体の代表者であるとともに、ユダヤ人退役軍人会の指導的立場にあり、ドイツを誇りとする愛国者であった。ナチ体制を一時的なものと考えたためもあったが、ドイツに忠実であった彼のような人間には出国などまずは考えられなかったのである。

しかしナチ体制成立後、家族はそれまでシナゴグに行ったこともなかったのに、ユダヤ教を大切にするようになった。それは両親が家族の結びつきの感情を子供たちに与えようとしたためだろうと、妹は推測している。父親はその後神経衰弱になり、自殺を図ったこともあった。またコーシャの肉が手に入らないので、ほとんど野菜しか食べられなくなった。ユダヤ教の祭日に父親は自分で宗教的儀礼にのっとって庭で飼っている鳥を絞めようとしたが、それもいやがって、なかなか肉を食べることが出来なかった。

第三帝国成立の翌年に起こった妹の誕生会の一件で、一家はナチの反ユダヤ主義政策が人々の生活に浸透してきたことに手ひどい形で気がつかされることになった。1934年2月、妹の8歳の誕生日パーティに招待した子供が誰一人も来なかったのだ。子供にとっての最大の行事である誕生会のため、母親はご馳走やプレゼントなど準備万端ととのえていた。夜になって隣村の牧師の奥さんが、自分の子供だけを行かせることは出来なかったと、謝りにきたが、自分たちが他の人と違うということを認識させられた出来事だった。一年前の誕生会はナチ政権成立直後だったので、このようなことはなかった¹⁴⁾。

母親は以前、サンドイッチを余分に作り、妹と同じクラスの貧しい子供が朝食をとっていないのだろうからと、渡すようにさせていた。このような慈善的な行為はまだ6歳だった妹には負担であったし、その子供はこの施しに、屈辱感を抱いたのかもしれない。彼はその後町でナチの大物になった。貧しい人がものを受け取る時、どんなに敏感な気持ちになっていたか、母は気がつくべきだったと、彼女は言う。

彼女たちの通っていた学校はプロテスタント系でユダヤ人は彼女たち姉妹だけだった。体育教師は彼女たちにつらく当たった。彼女はほとんど思い出さないが、妹は敏感でそのような学校でのいじめは悪夢のよう

な記憶として残っているようだ¹⁵）。彼女の担任教師は親切だったが、ユダヤ人を助けた廉で後に退職させられたという。

父親は第一次世界大戦の際に鉄十字を得ていたの、彼女は家政学校に進学出来た。一年後ユダヤ人孤児院で実習のポストを得たため、38年4月にはハンブルクに移った。14歳で家政学の生徒として、家事の手伝いや子供たちの世話をしたが、なかには自分よりわずか数か月だけ若い生徒もいた。

孤児院の前をドイツ人の子供たちがユダヤ人殺害の歌（前述のグートマンの項参照）を歌いながら通るなど、ユダヤ人の子供を精神的にいたぶるようないじめが頻繁に起こっていた。また彼女たちが男子校の前を通っても同じ事をされたので、身の危険を常に感じて生活していた。彼らはおどおどした身の護り方を知らない女の子を狙ってはいじめていた。

孤児院には、親がいても学校に行くことが不可能になったユダヤ人の子供も入っていた。11月ボグロム後、妹もこの孤児院に来て、ようやく友だちが出来たが、それは彼女にとって非常に重要なことだった。彼女自身はボグロムを経験しなかったが、それを体験した妹にとっては一生の心の傷になり、今でもトラウマとなっているという。

マルレーネ・レーマン

彼女の家庭はコーシャを守っておらず、豚肉も食べ、ユダヤ教の重要な祭日のみシナゴークへ行った。彼女はユダヤ人学校に通っていたが、ハンブルクのシオニスト・グループに参加しスポーツをした。

インゲ・ラメル

父親は公務員ではなく、ドレスデン銀行につとめていたが、職業官吏再建法によって失職した。ただし彼は第一次世界大戦の前線兵士だったので、辞めさせられたのは少し遅く1936年末のことである。母親はファッション関係のデザイナーの仕事についており、リベラルな家庭だった。家庭内では政治的なことが話された記憶はない¹⁶）。11月ボグロムでザクセンハウゼンに逮捕されるまで、父親は親戚や知人に英語・フランス語・スペイン語の個人レッスンをしていた。出国のためには語学が必要であったのだ。父はこのレッスンで得たお金で、子供たちの教育

を続けることが出来た。

彼女も学校でのいじめを経験している。クラスでは差別され、自分が望まれていないことはよくわかっていた。学校の椅子の下に嫌なことを書いた小さな紙がおいてあったり、帰り道ではぶたれたりした。教員の一人はSAの制服を着用していた。34年から38年には女子ギムナジウムに通ったが、嫌な思いをさせられるのは同じだった。11月ボグロム後、ドイツ人教師がユダヤ人の子供を教えることが禁止されたため、ユダヤ人の子供はユダヤ人学校でしか勉強出来なくなり¹⁷⁾、彼女も14歳の時に女子ギムナジウムをやめざるを得なかった。親切な教師も何人かいたが、控えめな対応でしかなかった。数人の教師からは学校をやめて欲しいという態度がありありと感じられた。また、水泳を習うということは子供にとって重要なことだったが、水泳と一緒にやらせてもらえなかったことは、とても気持ちが沈むことだった。

エーファ・パッペンハイム

両親はリベラル派のユダヤ人で、父親は法律家で税務署の参事官をしていた。外では反ユダヤ主義がひどかったが、小学校自体はそれほどはなかった。彼女は1934年からギムナジウムに通ったが、まだユダヤ人の先生もいた¹⁸⁾。教師は教室に入る時にハイル・ヒトラーと言わなくてはならなかったが、そのやり方が人によって違うのは子供たちにもよくわかった。ユダヤ人の先生はハイル・ヒトラーとは言わず手を中途半端にあげただけだった。彼女はここで子供たちと一部の先生にひどい扱いを受けたため、ユダヤ人学校へ転校した。

ヴェルナー・ヘンドラー

彼は、出生地が住民投票の結果ポーランド領になったため、ヒルシュベルクに引越した。子供の時、ナチのテロの恐怖を初めて感じたのはレーム一揆の時であった。ヒルシュベルクで5人のユダヤ人が殺害されたが、一人はすぐ近くに住んでいたユダヤ人弁護士で社会主義者や共産主義者の弁護をしていた人だった。

ウルズラ・ヘルツベルク

父親が失業したが、非常にわずかな額の給付金が与えられただけで

あったので、彼女は低学年の児童への算数やドイツ語の補習授業をして、生活費の足しにした。彼女の教育は15歳で終わった。

エスター・ゴラン

彼女は女子ギムナジウムに入ることは出来ず、国民学校へ残らざるを得なかったが、クラスでたった一人のユダヤ人の女の子だった。休み時間も校庭の片隅にたっていないではならなかった。ただし彼女は課外活動を続けられた。

1936年夏、プールの入り口に「犬とユダヤ人はお断り」と掲示があったにもかかわらず、彼女は水泳の授業に参加することが出来た。教師は特に親切ということではなかったが、確信的なナチではなく、カリキュラムの一環だと主張してくれた。彼女はこの時の、水泳試験の合格証をまだもっている。

注

- 1) Wolfgang Benz (Hrsg.), *Die Juden in Deutschland 1933-1945. Leben unter nationalsozialistischer Herrschaft* (München, 1988), 330-334. 1933年2月12日、プロイセン文部大臣は「責務から情け容赦なく」……ドイツの学校からすべての「非ドイツ的」なるものを一掃することを発表している。*Ibid.*, 330. ベルリンでは33年4月1日、ドイツ人学校のユダヤ人教師が解雇された。解雇の時期は州によって、ばらつきがある。

ユダヤ人生徒の排除には、学費の兄弟割引の停止(33年3月22日)や「東方ユダヤ人」など非ドイツ国籍の生徒の学費は2倍とする(34年3月22日)などの経済的なものや、義務教育を除く学校の新入学者の場合、ユダヤ人の生徒数をドイツ人生徒数の15パーセントにおさえる命令(33年4月25日)が出されるなど、さまざまな方策が用いられた。Joseph Walk (Hrsg.), *Das Sonderrecht für die Juden im NS-Staat. Eine Sammlung der gesetzlichen Maßnahmen und Richtlinien - Inhalt und Bedeutung* (Heidelberg, 1996), 5, 9, 11, 23, 43, 66, 75-76, 101.

- 2) 1933年8月22日にはヴァンゼーなど湖やプールにおける、ユダヤ人の水浴が禁止された。Walk (Hrsg.), *Das Sonderrecht*, 48. 教師によるいじめはさまざまであるが、ユダヤ人生徒の体に触れるのを露骨にさせる体育教師、ユダヤ人生徒の椅子を他の子供たちに洗剤とブラシで清掃させた教師などの例が伝えられている。子供たちによるいじめも、学校でユダヤ人生徒を階段から突き落としたり、道で石を投げつけたりするなど、ユダヤ人生徒の生命にかかわるような暴力行為にエスカレートしていった。もちろんいじめを受けるかどうかについては、本人が暴力に立ち向かえるか、教師が

- 熱心なナチ党員が、どのような居住地区か、などさまざまな要素が働いた。Benz (Hrsg.), *Die Juden in Deutschland*, 336, 338.; Gudrun Maierhof, *Juden unerwünscht!*, in: Maierhof/Schütz/Simon (Hrsg.), *Aus Kindern wurden Briefe*, 40-41.
- 3) Benz (Hrsg.), *Die Juden in Deutschland*, 345.
 - 4) Werner T. Angress, *Generation zwischen Furcht und Hoffnung. Jüdische Jugend im Dritten Reich* (Hamburg, 1985), 19-20; Benz (Hrsg.), *Die Juden in Deutschland*, 330, 333, 336, 348-349.
 - 5) Harris/Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers*, 93.; Maierhof, *Juden unerwünscht!*, 41-42.
 - 6) Walk (Hrsg.), *Das Sonderrecht*, 256, 268-270. すでに1935年9月10日の指令によってユダヤ人生徒はドイツ人学校から排除されることになっていたが、その指令は完全には実行されていなかった。*Ibid.*, 126. ポグロム直前の11月3日には、ドイツ人学校のユダヤ人生徒がドイツ人生徒の体に直接触れるような学校行事への参加が禁止されている。*Ibid.*, 248.
 - 7) Benz (Hrsg.), *Die Juden in Deutschland*, 359-360.
 - 8) Walk (Hrsg.), *Das Sonderrecht*, 17-18; Benz (Hrsg.), *Die Juden in Deutschland*, 338-340; Angress, *Generation zwischen Furcht und Hoffnung*, 14.
 - 9) カブートはポツダム近郊の地名で、かのアインシュタインの別荘があり、この児童ホームも一時彼の別荘も使用したことがある。他のユダヤ人学校が生徒急増への対応に追われ、間に合わせた教育体制にならざるをえなかったのに対し、カブート児童ホームでは改革派教育学の理念にそった教育がなされ、教師たちの意識も高かった。Benz (Hrsg.), *Die Juden in Deutschland*, 361. しかし、このカブートでさえ、1年以上勤務した教職員はわずかであり、カブートは生徒にとっても教職員にとってもいわば出国までの中継地点のような位置づけにあった。Hildegard Feidel-Mertz/Andreas Paetz, *Ein verlorenes Paradies. Das Jüdische Kinder- und Landschulheim Caputh (1931-1938)* (Frankfurt a.M., 1994), 7, 327.
 - 10) 以下の文献によれば、カブートの教職員のうちホロコーストでの死亡が確認されたのは、ファイアータークのみである。11月ポグロムによりカブートが破壊された後、彼女はユダヤ人救援組織で献身的に働いた。彼女にも出国の機会が与えられたが、友人を残して行けないという理由で断ったという。Feidel-Mertz/Paetz, *Ein verlorenes Paradies*, 54, 327.
 - 11) たとえば、ザクセンでは33年3月15日に宗教にのっとったやり方で動物の殺害が禁止された。Wolfgang Benz, *Exclusion, Persecution, Expulsion: National Socialist Policy against Undesirables*, in: Johannes-Dieter Steinert/Inge Weber-Newth (eds.), *European Immigrants in Britain 1933-1950* (München, 2003), 61. また、禁止されていない地区でも、屠殺専門家が国内・国外に移住すれば、それでコーシャの肉が手に入らなくなってしまっ

たのである。

- 12) ニュルンベルク法 (1935年9月15日) は、ユダヤ人を二級市民としてその公民権を奪い、またユダヤ人とドイツ人が性的関係を結ぶことを禁止した。この人種主義的法律はユダヤ人を公的生活から排除するものであり、職業官吏再建法とともに重要な意味をもつ。
- 13) Gutmann, *Wer möchte nicht*, 8-9.
- 14) ヘラがこの話を私にしている時、同席していたご主人は「これは勇気の問題」だと口をはさんだが、果たして自分だったらどうしたか。子供を介した踏絵のような事件である。
- 15) Harris / Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers*, 26-29.
- 16) 彼女の祖父、父親がシナゴーク付属の合唱団を指導や指揮をしており、音楽的な家庭環境だった。
- 17) 注6 参照。
- 18) 注1 参照。

(本稿は2005年度成城大学文芸学部特別研究助成金による成果の一つである。)